



読者へのお願

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。その感銘をぜひ、あなたの親しいお友だちや、お近くの方々にお伝えください。それと、いっしょに「読後の感想」を、左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、この本には一字でも誤植がないようにしたいと思っておりますので、もしもお気づきの点がありましたら、あわせて教えてください。おかげさまで、カッパ・ブックスのどの本も版を重ねるごとに、誤植が一つ一つ少なくなっております。お手紙には、職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九

光文社出版局

神吉晴夫

随筆 旅路のはてに

昭和31年12月1日 初版発行 ㊟
昭和32年1月15日 8版発行

¥ 130



著者	本多彰
発行者	神吉晴夫
印刷者	山元正宜

東京都文京区柳町26・三晃印刷

発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光文社
振替東京 115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。
表紙の模様・意匠登録 116613

〔関川製本〕

旅路のはてに

本^{ほん}
多^た
顯^{あき}
彰^{ちやう}著



商標登録 467067

まえがき

こういう随筆を、こんなにたくさんに書く能力が私にあるということを、書いてみるまで私は知らなかった。だから、荒正人あらいまひとさんが、西日本新聞東京支社の文化社会部長である石内弘一いしうちひろかずさんといっしょに來られて、三十回ばかり随筆を書いてみないか、と言われたとき、私は、ちょっとたじろいだ。荒さんがいろいろ知恵を授けてくださったので、少しは書けそうな気がしだして、引き受けてしまったが、不安は去らなかつた。

ところが連載が始まり、十回ばかりになったところ、光文社の編集長の加藤一夫かとうかずおさんが見えて、連載が終わったら本にしたい、と言われた。そして、まもなく、常務取締役の神吉晴夫かみきち はるおさんが外遊から帰って來られると、その話は本ぎまりにきまつた。ちょうど、そのころ、石内さんから電話がかかってくるまで、評判がいいようだから、六十回まで書け、と言ってこられた。また、読者からは、はげましの手紙をもらった。

私は、これらの事情に大いにはげまされ、それまでよりは、自信をもって書けるようになり、書くのがたのしみになってきた。私は、そういう人間である。私を伸ばそうという親切心があったなら、叱ってはぜんぜんダメであつて、かならずほめてくれなければならぬ。じじつ、六十

回まで書いたときに、もう夕ネはつきたのに、石内さんが、電話で、おもしろいから百回まで書けと言われ、かわって電話口へ出た荒さんがまた激励してくださったので、書けないはずのものが、また四十回も書けたのである。

そういうことを思うと、私は、百回までたどりつき、その間、「引込め」という声をかけられずにすんだのは、自力ではなかったのだと思い、しみじみ、上記のかたがたに感謝するのである。また私の感謝は、文字どおりの拙文を最後までがまんしてくださった、東京支社の編集長である林田稔はやしだのぶさんや福岡の本社のかたがた、それから八十万にあまる読者のみなさんにも当然ささげられなくてはならない。

掲載は、昭和三十一年七月二十八日に始まり、週二回は時事問題を、という注文だったが、私にはかならずしもそれに忠実ではなかったようである。けれども、そういう文章によって、時の経過が自然に感じられるようになっていくことは、思いがけないことであつた。そこで、私は、内容別の分類はやめて、配列を掲載の順序のままにした。

文中に御登場を願ったかたがたは、ことごとく実名を記したが、御迷惑にならないように心がけたつもりである。しかし、もし万一にも御迷惑をおかけしたとするならば、幾重にもおわび申しあげたい。

昭和三十一年十一月十五日

本ほん多た頭あき彰ちやう

目次

まえがき	三	海シ浴	三三
余生	九	芥屋の大門	三五
なぐり込みの恐怖	一一	日本領土拡張案	三七
大親分	一三	物忘れ	三九
大先生のワイ談	一五	ヤクザむかしばなし	四一
どんたく	一七	臭気止め	四三
ドイツ語のウン	一九	自家用車	四五
関門連絡船	二三	出 <small>しゅっ</small> 藍 <small>らん</small>	四七
芥川 <small>あくたがわ</small> と九大法文学部	二四	お盆のたたり	五〇
呼 <small>よぶ</small> 子 <small>こ</small>	二六	悲慘	五二
おんぼろの話	二八	名医の強情	五四
ダブルベッド	三〇	英彦山 <small>ひこさん</small>	五六

手のかからぬ学生……………	五六	森田草平の不覚……………	九〇
浅瀬……………	六〇	孤獨……………	九三
一等犬と三等主人……………	六二	借金に課税……………	九四
水泳訓……………	六四	憂国の文学……………	九六
米兵をさとす……………	六七	未遂・置屋のあるじ……………	九八
まだ生きていた……………	六九	自殺志願者に……………	一〇〇
酒と天ぷら……………	七一	一不思議……………	一〇三
一年だけの紳士……………	七三	でたらめの意志……………	一〇四
漱石の居留守……………	七五	湖処子の子……………	一〇七
頑固な地主……………	七七	読書の秋……………	一〇九
東洋一の鉱泉……………	七九	非道な形式主義……………	一一一
旅の恥……………	八一	無言の演説……………	一一三
エレヴェーター……………	八三	悪人国の可能……………	一一五
筍の家……………	八五	稀有の体験……………	一一七
学生運動と就職……………	八八	暴風の中で……………	一二九

十一歳で……………	一三	不幸なことに……………	一五四
疑似インテリ……………	一三三	もつとユーモアを……………	一五六
大学教授の訴え……………	一三六	太陽語録……………	一五八
九州の石川淳……………	一三六	コーヒーの飲みかた……………	一六一
平井教授の靈に申す……………	一三〇	大イカ……………	一六三
それはそれ……………	一三三	殺人餅菓子……………	一六五
自由論議によせて……………	一三四	死刑囚と十姉妹……………	一六七
泥まみれのまんじゅう……………	一三六	めがね……………	一六九
学生に月給を出す大学……………	一三八	オランダ人の旧悪……………	一七三
古いことわざだが……………	一四二	カンニング……………	一七四
野の虎……………	一四三	検閲狂？……………	一七六
大宰府の松茸狩……………	一四三	為朝の子孫……………	一七八
生産性向上？……………	一四七	残酷な精進……………	一八〇
人間機械……………	一四九	両旗頭に……………	一八二
アンマとレンコン……………	一五三	月光の曲……………	一八五

フ	ン	一七七	死に場所	三〇
まぬ	け	一七九	お別れ	三三
九州の方言	一九三				
大	濠	一九四			
悪い寝覚	一九六				
物わかり	一九八				
大悲劇詩人と一兵卒	二〇一				
とんだ吸血鬼	二〇三				
つぶれた希望	二〇五				
ソリと老人	二〇七				
文化講演代理	二〇九				
墓	石	二一一			
福岡の外人たち	二一四				
高橋先生	二万歳	二一六			
文化の日	——小さい人たちに	二一八			

余 生

いまは、人生は六十になったそうだが、私は人生五十の約束で生まれてきたのだから、まだ六十にはならないけれども、余分の生命を生きさせてもらっているわけだ。だから、人口過剰といわれるときにも、食糧不足といわれるときにも、肩身のせまい思いをしなければならぬはずである。昔のように姥捨山うばすてやまがあつたら、男女平等の今は、きつと爺捨山おじすてやまが創設され、さしずめ私などはそこへ捨てられなくてはならない。選挙権もハク奪されても文句は言えないはずである。

じっさいはそうなんだが、そういうふうに見えるほど私は殊勝しゆしやうではない。横着な私は、余生というものを、そのような卑屈な気持ですごそうなどは毛頭、考えない。私は、父の年まで生きるとすれば、あと十年たらず生きられるはずだが、病弱な身には、それは望まれないから、もっと早く死ぬであらう。終戦後十年は、またたくまにすぎた。何をするひまもないうちに過ぎた。この調子だと、のこりの年月もたちまち過ぎてしまうであらう。

近ごろは、花が咲き、それが散って実をむすぶのを見ていると、心がせきたてられる。自然のうつりかわりを目のまえに見ていると、そのあわただしさに焦燥しやうそうを感じる。一日が終わると、また一日生きてる時間が短くなったと思ひ、いや、時には、時計のうつたびごとに、生命のちぢむ

のを感じる。

そして、もう残り少なくなったのだから、時間を大切にしようと思う。大切な時間を、他人に使われてたまるものか、と思う。私は、できるだけひとりでいたい。ひとりでいるときほど、にぎやかなことはない、とホイットマンは言ったが、まさにそのとおりであって、つまらない客が来て、むだ話をされると、私はいらだつだけだ。早くひとりになりたい、早く帰ってくれ、と心の中でわめきつづける。

もう私は、むりな原稿を書くまい。読みたくもない本を読んで書く書評は、いっさいお断わりだ。会合にもいっさい出席しないようにしよう。もともと私は出版記念会には出ないことにしてきたから、近ごろそれが激増したと聞かされても、少しも当惑しない。友人の出版を祝うことは、たぶん、うるわしい友情の発露はつろうなんだろうけれども、私は自分が本を出して、満足をおぼえたことは一度もない。いつも取り返したくなるのだから、自分だったらお祝いをしてもらう気にはなれない。これは一方的な理屈で通用しないだろうから、とにかく会には出たくないのだ、と言いつつおことう。会に出ないのは、時間が惜しいということが第一だが、もうあと何回も食べない食事の一回に、食べたくないものを食わされるのがいやなのである。

また私は、他人の思惑おもわくを考えないことにした。用もないのに他人の御機嫌ごきげんをとるのをやめた。いやな依頼はかまわず断わるし、いやな人の訪問は、婉曲えんきよくにはなく断わる。

このようにして私は、長い人生の旅路のはてに、思いがけない静かな生活を楽しめるようになり、過去五十有余年の生涯が、いかに無駄に満ちていたかを回想するのである。

なぐり込みの恐怖

神戸駅（三宮）でおりて、道をたずねながら元町（もとまち）へ行き、それから、私はたずねる人の家のほうへ歩いた。その家はすぐ分かった。大きな門構えの家で、門をくぐると、けわしい坂になっている。その坂をのぼりきったところに頑丈な玄関がある。格子に手をかけて、おそるおそるあけると、片隅から「おう！」とうなる声がある。身のちぢむようなり声である。見ると鉄格子の向こうに、巨大な土佐犬が立ってこちらをにらみつけている。

そのうなり声に応ずるもののように、犬よりも、もっとどうもうに見える若者が、つんつるてんの着物を着て、毛脛（けづね）をあらわしながら出て来た。私はひるんだ。来るんじゃないかと思った。しかし、ついで主人が現われたとき、私はほっとした。主人は、東京で知り合っていたとおりのこにこ顔を私に向けて、よく来てくれました、と言ってくれたからである。

しかし、座敷におおされ、あいさつをかわしたあとで、私は恐るべきことを聞かされた。一週間まえに、この家へなぐり込みがあり、この家の主人は、彼に向かつて来た男と組み打ちして、

背負投げをかけた。そして、その男の体が宙に浮いた瞬間に、主人の子分が、下からその男の腹にドスを突きさした。子分は、すぐ自首し、いまは、ぶた箱にいる。

「家内のおやじに、もらいさげに行ってもらっているのだが、署長が新米しんまいなものだから、なかなかからちがあかないので、そんなことで少し取り込んでいて、失礼するかもしれませんが。」と主人は言った。

私は、仕返しがあるのではないか、そしてその仕返しは、今晚あたりあるのではないか、そう思つてがたがた体がふるえた。しかし、そのことをたしかめるのはこわかつたし、また臆病のようにも思われたので、ひかえた。それだけに、恐怖が心の底までしずみ、体がじんじんと鳴るのをどうすることもできなかった。夕飯は、主人の心づくしで、いちばんうまい神戸牛のこま切れのすき焼きだったが、私は、味わいもしないで、ただ無意識に嚙んでいた。

その夜、私は、十畳が三間つづいている広い二階にひとりでねかされた。生まれてはじめての羽根蒲団だった。重い蒲団になれている私には、それは軽すぎ、私は安定感を失つて、なかなか眠りにつけなかつた。もちろん、私の眠りを奪つたのは、そのことよりも、なぐり込みの恐怖であつた。私は、なぐり込みがあつたとき、自分が、この家の身内みうちでないことを、どのように証明したらいいか、と思ひまどつた。申しひらきするまえに、ぐさりとやられるのではないか、とおそれた。私は、鼠が天井裏を走る音に、おびえた。階段の上らしいところに、かすかな足音を聞

いたと思つては、とび起きた。春の宵は長く、夜あけはなかなかこなかった。ついに、それが来たとき、私は、ほっとしたが、立ちあがってすぐ倒れた。心身ともにくたくたに、疲れていた。九州赴任の途上、一夜の宿をかりた日の思い出である。

大 親 分

大阪おおさかに関西一の大親分がいて、神戸のSさんは、その養子分で、神戸一の親分だということだった。そのSさんと、まだ大学生であった私は、偶然のことから知りあいになった。

Sさんは東京とうきょうへ出てくると、私があるころ下宿していた本郷のMさんの家にとまった。Mさんは東京の市会議員をしたことがあり、在任中に汚職事件を起こした。そのことが載のった新聞を、Mさんはいせつに保存し、初対面の人に見せるのが常だった。Mさんは、私のことを「うちの書生」として、Sさんに話していたそうである。

(13)

ところが「うちの書生」は、賓客ひんかくであるSさんにたいして傲然ごうぜんとしていて、あいさつ一つしな
いのである。Sさんの部屋に呼ばれて、「菓子を食わないか。」と命令するように言われたとき、
奮然と席を立ててしまった。もとより「うちの書生」は、Sさんが、おそろしい商売の客とはつ
ゆ知らなかったし、また彼が私のことを思い違ちがひしていることもぜんぜん知らなかった。

しばらくすると、Sさんが私の部屋へ来て、両手をついた。「Mのやつがうそをいうものだから、とんだ失礼を申しあげた。おゆるしいたきたい。」と彼は言った。それから私たちはなかによしになったのである。

ある日、Sさんは「佃政さんにまだ会ったことがないから、今日会おうと思うが、あんたもいっしょに行かないか。」とさそった。佃政さんの本名は金子政吉かねこ まさきちといって関東一の大親分であり、清水次郎長しみずのじろちやうぢやうよりも威勢があつた人だそうである。

金子さんの家は本所ほんじよにあつた。きれいな家だったが、小さな家で、何の設備もない家だった。Sさんが案内をこうと、小柄な老人があらわれて、「私が金子です。」と言つた。Sさんは、「今日は素人衆といっしょだから仁義にぎぎはひかえます。」と言つた。

私は残念だった。私は、親分同士の本格的な仁義を見ることを、期待していたからだった。仁義においては、些細ささいな非礼や些細な過失も大きくとがめられ、時には出入りの原因になるとのことであつた。初対面で、手をついてあいさつするとき、たとえば、親分がすでに死んで亡ないときには、拇指おやゆびを手のひらの下にかくすなど、自分の身分、境遇を、すべて所作しよさの中にあらわして相手に理解させるのださうである。それが、一つでも間違ひ、真実でないことが分かれば何をされても仕方がない。

佃政さんは、しじゅうにこにこしてものやわらかだつた。これが関東一の大親分とは、どうし

でも思えなかつた。

この会見のしばらくあとで、私は金子政吉氏の名を新聞で見つけた。同氏は本所に何十軒とかの貸家を持つていたが、家賃は明治の初年のまま、すえおきだったので、借家人たちが気の毒がり、協議して値あげを申し入れたが、金子さんはどうしても聞き入れない。何度頼んでもだめなのである。借家人たちは、やむなく、お金を積みたてて、金子さんの銅像を建てたという記事であつた。

大先生のワイ談

私の出身の高等学校の教授の中には、天下に名を知られた学者がたくさんにいた。中川芳太郎、桜井天壇、大賀八郎、竹内端三、その他、のちに大学者として知られた先生が、雲のごとくにいた。ここでおうわさをする藤塚鄰先生もそのお一人である。

先生は、のち京城大学の総長におなりになった碩学であるが、高等学校教授時代には、生徒監を兼ねておられた。私たちのクラスは、みづから秀才組と称して、試験勉強をしないのを誇りにし、試験の前日に遠足に行くというような暴挙をあえてした。外人教師の時間には、十分進ませた目覚時計を教授の机の上において、全員逃げだし、ある時には、そのついでに、一日の講義全